

「花のスペシャル」常磐津文字蔵の常磐津弾き語り・・・平成13年3月31日

三味線：常磐津文字蔵

上調子：常磐津 齋蔵

三世相錦繡文章

あらすじ

六三郎の子を宿していたお園が、実の兄、長庵と名乗る偽医者に、墮し薬を飲まされ流産させられた挙句、幼い娘お松も殺されたため、お園は思い余って長庵を殺してしまう。お家の宝を紛失した六三郎と心中を決心し、洲崎堤の満開の桜を前に心中し、十万億土の死出の旅のはてに、地獄の法廷に辿り着く。閻魔大王の裁きを受けると、兄の長庵の悪事が露見して、真実を知らされ、殺された娘ともども、この世に帰される。最後は目出度く三社祭りの大パレードでグランドフィナーレを迎える。



今回は二段目道行蝶吹雪、通称「州崎堤の段」を弾き語りにて演奏します。道行、心中物の極め付けの一つです。

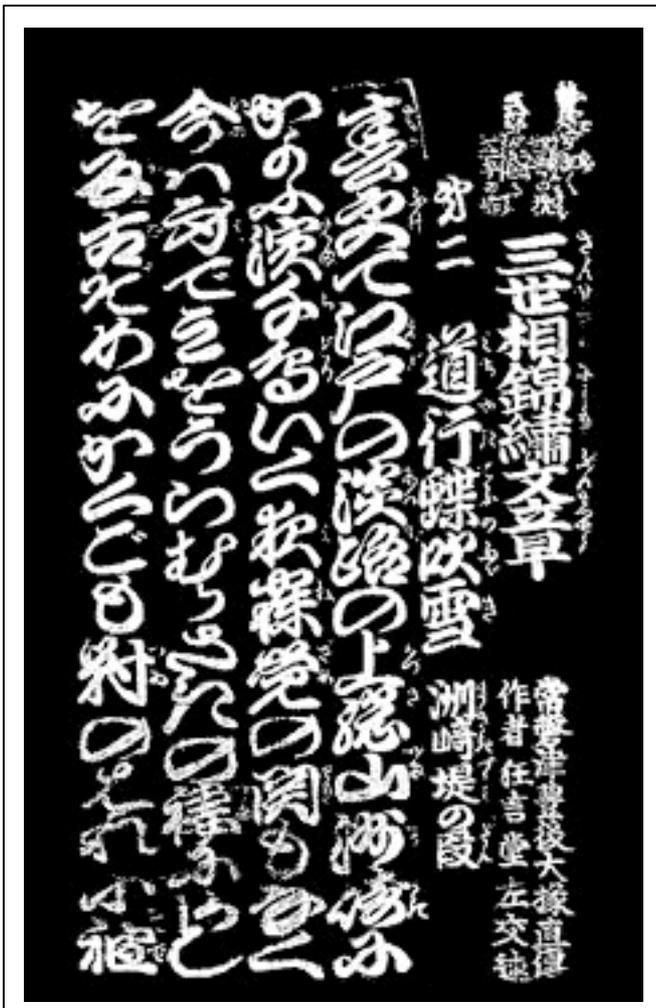


一中節と常磐津節について

初代都一中は 1670 年、京都御池境町明福寺の住職から還俗し、浄瑠璃の演奏家となり、一中節を創始する。次第に人気を集め、人形浄瑠璃や歌舞伎にも出演し、江戸でも活躍。74 歳で亡くなるが、その門弟の都国太夫半中は江戸で豊後節を創り、宮古路豊後掾となって空前絶後の大流行を起こす。それが後の常磐津、清元、新内等の基となる。三味線は中棹で、流麗な旋律、京言葉の上品な詞章が特徴である。

豊後節の大流行がかえって時の幕府に脅威を与え、八代将軍吉宗の享保の改革後、豊後節の全面禁止令が出され、多くの演奏家が弾圧を受け、追放の憂き目にあうが、豊後掾の弟子の宮古路文字太夫は 1747 年、常磐津文字太夫改姓し常磐津節を起こす。江戸文化の絶頂期に舞踏劇の伴奏音楽として発展し、数々の名曲が作られた。

三味線は中棹で、やわらかい音色。浄瑠璃は江戸言葉の自然な抑揚で、台詞の部分が比較的多く、より写實的に語られるのが特徴である。



常磐津三世相錦繡文章について

この曲は安政四年、歌舞伎狂言として上演されて以来、史上稀にみる大当たりを取った大浄瑠璃である。六つの段から構成されており、福島屋という遊廓の遊女お園と、悪人の計略により、お家の宝を紛失、浪人の身となった六三郎との現在、過去、未来を舞台にした大スペクタクルロマンである。

十二世都一中（常磐津文字蔵）

十二世都一中は一中節の家元であると同時に常磐津文字蔵として常磐津の演奏家でもある。歌舞伎や日本舞踊の地方として演奏する傍ら、10 年前から古典音楽の振興と普及のためレクチュアコンサートを手がけ、その活動は多くの支持を得て、年々活発になってきている。現在、ラジオの文化放送でレギュラー番組「都一中の我ら夢中人」（毎週日曜日午前 6 時 30 分から 15 分間）が放送され、好評を得ている。